

概要報告

実施期日	8月1日(木)
部会名	中学校 特別支援教育部会

神奈川県研究主題

「個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫」

テーマ

『校内全体で行う支援の必要な生徒への支援法』

提案概要

学習内容を理解できない生徒や、他の生徒とうまくコミュニケーションを図ることができない生徒が、どのような困難を抱え、その困難さに対していかに校内支援体制や具体的な支援方法を確立していくかを追求するため「校内全体で行う支援の必要な生徒への支援法」をテーマとして設定している。

テーマに対するアプローチとして、「環境のユニバーサルデザイン」「授業のユニバーサルデザイン」「人的環境のユニバーサルデザイン」の3つのユニバーサルデザインを意識し、学校全体でユニバーサルデザイン化の環境作りを行っていく。

(1) 特別支援学級での実践事例

- ・課題：Aさんは、国語や英語の問題プリントに対し、「めんどくさい」「疲れた」と言い、授業に取り組もうとしない場面が多く見られる。
- ・取組み：Aさんの教育的ニーズを、MI理論を用いて実態把握を試みた。MI理論とは、人間の持つ8つの知能からアセスメントを行うもので、Aさんの抱える課題は「言語的知能」にあてはまる。ただし、ただ苦手であることを決めつけるのではなく、以下のような考察を行った。

言語的知能の知能分野である「話す」「聞く」「読む」「書く」のうち、「書く」以外の分野については、その内容によって得意不得意に大きな差がないことがわかった。したがって、Aさんは「書く」ことについて難しさや抵抗感を感じている可能性が高い。これらの実態把握をもとに、以下のような支援を行った。

(ア) 本人が「好き・得意」としている内容に絞り、プリントは使わず iPad を用いたクイズ形式の授業を行うことで、「次は〇点取りたい！」という反応が見られ、生徒の意欲を引き出すことができた。

授業UD階層モデルに照らし合わせると、基礎となる「参加」の部分が達成されたと考えられる。

(イ) 振り返りの中で「新しく知ったことは〇〇です」のように、書く項目を制限した振り返りを行うことで、苦手としていた「書く」意欲を引き出した。これは授業UD階層モデルの「理解」にあてはまると言える。

(ウ) 書く事への抵抗が和らいだところで、日記を導入。自ら書きたいことを文字に起こすことができるようになってきた。これは授業UD階層モデルの「習得・活用」にあてはまると言える。

このように、ユニバーサルデザインを意識して授業を組み立てることにより、心理的なハードルや抵抗感が取り除かれ、生徒の学びの充実につながった成功例と言えるだろう。

(2) 通常級での実践事例

(ア) Bさんのケース

- ・課題：Bさんは、自閉傾向の診断があり、授業中に指名されることや発表することが苦手。
- ・取組み：保護者、本人と面談を行い、どのような準備を整えたら本人が答えられるかを確認してから授業に参加をした結果、取り組みの末に活動に主体的に参加することができたという成功体験につながった。

(イ) クラスにおけるケース

- ・課題：多くの生徒が間違えることに恐怖感があり、消極的な参加になりがち。

- ・ 取組み：職員研修にて「間違えることの価値」を考察。

その上で、多くの生徒が間違え合う機会を設定することでコミュニケーションが苦手な生徒も輪の中に入った意見交換ができた。

(3) 学校のユニバーサルデザイン化への実践

上記の実践事例のように、環境、授業、人的環境のユニバーサルデザインを意識することが生徒の抵抗感を和らげる手立てになっている。そのため、学校全体としてユニバーサルデザインに対する意識が向上することが求められている。意識向上の実践として以下の取組みを紹介する。

(ア) 授業UD化チェックシートの作成・導入

学校の実態に見合った独自のチェックシートを導入し、意識向上を図るとともに、手立てに対する生徒の変容を見取ることができた。

(イ) 県立支援学校による研修会、巡回の活用

特別支援学校のセンター的機能を活用することで、専門性を高めると共に、評価を受けての実践改善につながった。

質疑応答

○ 質疑：特別支援学級の実践において、Aさんの書く能力はその後どう向上していったのか。

応答：ハードルを取り払った結果、書く事への意欲が向上し、書く量が増え、現在は漢字などに挑戦している。

○ 質疑：環境のユニバーサルデザインについて、フロントゼロにどのような手応えを感じているか。

応答：成果を客観的にお答えすることは難しいが、人間の限られたメモリーの中で、情報刺激がメモリーの消費につながることは明らかなので、続けていきたい。

○ 質疑：発表方法や提出物を選ばせたり用意したりするのは大変ではないのか。

応答：労力が必要なのは事実だが、それによる生徒への良い影響があるのは明らかであるので努力をしていきたい。

協議の柱及び協議概要

協議の柱を「学校全体としてユニバーサルデザイン化の意識向上のための働きかけ」とし、小グループで実現可能な手立てを出し合い、共有した。以下はその一部である。

- ・ フロントゼロなど、教室整備の手立てを全体で共有する。
- ・ 時計タイマーを活用し、本時の流れ、番号、矢印などで視覚的にわかりやすくする。
- ・ 時間割や終わった課題など、その都度確認したり消去したりする。
- ・ ユニバーサルデザインの本質的な部分を、教員間で理解を深め、共有する。
- ・ 発問に対して指名以外の方法で生徒の考えを吸い上げる工夫をする。
- ・ タブレットか手書きか発言か、アウトプットの方法を生徒が選べるようにする。
- ・ 交流級との関わりを増やし、生徒も教員もお互いに理解し合える環境を整備する。

まとめ概要

県立支援学校のセンター的機能の活用等、学校種を超えた連携は大変評価すべき取組みである。また、特別支援学級の担任でありながら、学校全体の支援の在り方や、生徒の指導、支援に主体的に参画していることも大変重要な取組みである。学級種に関わらず、支援を必要とする子が多く在籍している今般の学校においては学校の支援力ともいうべき根本的な資質を向上していくことが不可欠であるが、これらの取組みはそのために必要な具体的な方法に迫るものである。